

## 「環境問題の科学社会学」

立石 裕二 著

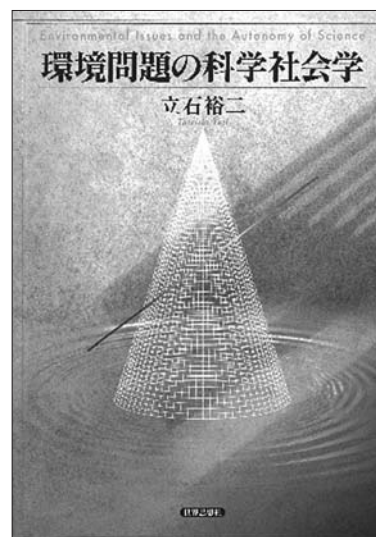
単行本, 312ページ, 定価3,200円  
(世界思想社, 2011年3月)

環境問題に関連する研究を仕事と思って取り組んでいます。個々の課題について考察することはあっても、問題全体がどのような位置づけなのか、そしてどうしていくべきなのかについて考えることは、忘れがちになってしまいます。そこで、本書を読み直しました。

まず、「科学社会学とは何か」ですが、「科学・技術と社会との関わりや、科学・技術と社会の界面で発生する諸問題を分析する社会学の一領域」と定義されています。その独自性としては、広い歴史的文脈・社会的構造のなかで科学技術を捉える点にあるそうです。そこでは、科学と社会の「相互作用」の把握が重要となります。本書では、行政や環境運動、研究者が、どのように影響を及ぼし合って環境問題が展開していったのか、その過程を動的に明らかにしています。そして、科学の「自律性」(学術動機から研究が進む状態)を維持しながら、環境問題に対して批判的に取り組み、問題解決に貢献するための社会的条件について分析しています。

事例として、イタイイタイ病問題、長良川河口堰問題、化学物質過敏症問題を挙げ、それぞれの問題を時系列に解説し、分析しています。イタイイタイ病問題では、研究者の「動機(そもそもなぜ研究が行われたのか)」について、研究者集団のおかれた社会的状況を捉えてその要因を探り、「科学委託」という行政と科学の関係の在り方について考察しています。長良川河口堰問題では、環境運動による「批判的科学ネットワーク」が前面に出た「対立先行型」の環境問題の例として、専門分野ごとに行政と運動側の科学的対立の形態を分類し、研究資源の不均衡等、それぞれの状況の中で、どのように科学の自律性を維持できるか、あるいは、それができない場合、どのような対応が必要かについて議論しています。化学物質過敏症問題では、科学と環境運動が「問題フレーム」を共用した「科学先行型」の例として、化学物質過敏症という科学的知見の不確実な問題(「不確実性」)が、「生産」され、室内空気汚染というフレームで研究され(「不確実性の消費」)、制度化されていったという面から考察しています。ここでは、科学の制度化に伴う「不確実性の切り捨て」が起きているとも考えられ、問題の出発点に立ち返り、「再課題化」することの重要性が述べられています。

3つの典型的な環境問題において、それぞれのアクターが、どのような動機で、どのような制約条件のなか、問題に取り組んだのかについて書かれているため、問題の流れとメカニズム(どうしてそうなったのか)がよくわかり、興味深く読むことができました。また、上記のように様々な用語で概念化されているため、問題の構図が捉えやすくなり、現在の環境問題の理解や今後の展望、対策を考えるのにも、大変役に立つと思います。



(近畿大学医学部 環境医学・行動科学教室 水越厚史)